

Letter for Members

【コンテンツ】

- 平成25年度科学技術分野の文部科学大臣表彰
(科学技術賞) 受賞報告…………… 487
- 2013 Biennial Joint Congress of CPS-JPS-KAP
学術大会参加報告…………… 489
- 受賞者の声…………… 490
—第122回学術大会優秀賞

平成25年度 科学技術分野の文部科学大臣表彰(科学技術賞) 受賞報告

広島大学大学院医歯薬保健学研究院
統合健康科学部門口腔生物学分野
教授 二川浩樹

このたび私こと広島大学大学院医歯薬保健学研究院二川浩樹は、平成25年度科学技術分野の文部科学大臣表彰(科学技術賞)を受賞いたしましたので謹んでご報告申し上げます。本賞は我が国の科学技術分野において顕著な功績をあげた者を対象とした科学技術賞が昭和34年に設けられ、平成17年からは若手科学者賞が設けられています。また、この他に創意工夫功労者賞、創意工夫育成功労学校なども設けられています。

授賞式は平成25年4月16日に文部科学省3階講堂にて厳粛な雰囲気の中で挙行されました。当日の会場での席順は受賞分野ごとに「あいうえお順」で並んで座り、また、賞状の授与でも、各分野の代表者は席順が一番前の人(「あ行の人」)が務め、下村文部科学大臣より代表で授与されます(図1)。その後、文科省の事務の

方から、順番に1人ずつ賞状が授与されました。

日本国政府の紋章として使用されている五七の桐(桐花紋とも)(図2)が施され、また、写真ではわかりにくいですが「文部科学省」という「透かし」が入った賞状(図3)と盾(図4)を授与されました。盾には、科学技術の象徴として「人類と火の関わり」がデザインされたゴールドメダルが入っていました。

自然科学分野は、科学研究費の細目表(表1)では、総合領域、複合新領域からなる総合・新領域系、数物系科学分野、化学分野、工学分野からなる理工系、生物学分野、農学分野、医歯薬学分野からなる生物系という3つの系の中に8つの分野があります。この各分野には脳神経科学、人間医工学、健康・スポーツ科学、ゲノム科学、生物分子科学、天文学、地球惑星科学、複合化学、電気電子工学、生物化学、農芸化学、薬学、



図1 文部科学省3階講堂での授与式。賞状は各分野の代表者へ下村文部科学大臣より授与されました。



図2 五七の桐(桐花紋)
日本国政府の紋章として使用され、また古くは足利幕府の小判にも使用されていたものです。



図3 文部科学大臣表彰(科学技術賞)の賞状



図4 文部科学大臣表彰(科学技術賞)の盾

基礎医学など52の細目があり、その一つが歯学です。歯学（歯科医学会）の中には、現在のところ21の専門分科会と19の認定分科会という数千人規模の学会がちょうど40あります。医学領域は、5つの細目にわかれています。医学会には数千人～数万人規模の学会が115あります。例えば日本感染症学会や日本糖尿病学会など1つの学会（分科会）で学会賞を取ること非常に大変なことですが、今回、広く自然科学分野の中から歯科発の研究が文部科学大臣表彰に選ばれたということは、非常に喜ばしいことであると考えて

います。

今後、後輩の先生方には、大きな視野をもって大きな世界・大きな土俵で戦って欲しいと思います。また、諸先輩方におかれましては、今後ともこれまで同様にご指導を賜りますようお願い申し上げます。

最後になりますが、このような執筆の機会をいただきました理事長・理事会の先生方、広報委員会の先生方に厚く御礼を申し上げます。

表1 自然科学分野の細目表 52の細目の1つが歯学です。

総合・新領域系												
①総合領域												
情報学	脳神経科学	実験動物学	人間工学	健康・スポーツ科学	生活科学	科学教育・教育工学	科学社会学・科学技術史	文化財科学	博物館学	地理学	腫瘍学	
総合・新領域系												
②複合新領域												
環境学	ナノ・マクロ科学	社会・安全システム科学	ゲノム科学	生物分子科学	資源保全学	地域研究	ジェンダー					
理工系												
①数物系科学分野				②化学分野				③工学分野				
数学	天文学	物理学	地球惑星科学	基礎化学	複合化学	材料化学	応用物理学・工学基礎	機械工学	電気電子工学	土木工学	プロセス工学	総合工学
生物系												
①生物学分野						②農学分野						
基礎生物学	生物化学	人類学	農学	農芸化学	森林学	水産学	農業経済学	農業工学	畜産・獣医学	境界農学		
生物系												
③医歯薬学分野												
薬学	基礎医学	境界医学	社会医学	内科系臨床医学	外科系臨床医学	歯学	看護学					

2013 Biennial Joint Congress of CPS-JPS-KAP 学術大会 参加報告

2013年4月13, 14日に日本補綴歯科学会（JPS, 日本）、Chinese Prosthodontic Society（CPS, 中国）および Korean Academy of Prosthodontics（KAP, 韓国）の3団体の共催による2013 Biennial Joint Congress of CPS-JPS-KAPに参加しました。第4回目となる今回はKAP主幹のもと、韓国・済州島、国際コンベンションセンター（ICC）で行われました。

プログラムの詳細は以下のページをご覧ください。

<http://www.kap.or.kr/2013jeju/>

参加者数は3か国全体で約1,200名中JPSからは65名（国内からは132名）、発表演題数はポスター発表全102演題中29演題、口頭発表は全36演題中14演題となっております。

今回のBJCのテーマはNew Horizon and Current Trends in Prosthodonticsで、発表やシンポジウムの内容も多岐にわたっており、矢谷理事長をはじめ9名のJPS会員の先生方が招待発表者として講演されておりました。個人的には、第4軍医大学のWu先生による顎顔面補綴領域へのデジタルテクノロジーの応用についての講演がとても興味深く、また、ノースカロライナ大学のCooper先生による前歯部欠損補綴に対する歯周組織マネジメントに関する講演では、総説的な内容だけでなく、実際の手技に関する解説もあり、とても参考になりました。

最後に、我々が発表いたしましたポスター演題（Finite element analysis of the abutment teeth restored with a post-and-core system consist of different composite material properties）が、Best Poster Presentation Awardに選出され、表彰を受けさせていただいたことを大変光栄に存じます。（明海大 勅使河原大輔）

Best Presentation Award 受賞者（敬称略、名前順）

- ・ポスター発表
石垣尚一（大阪大）
勅使河原大輔（明海大）
- ・口頭発表
加来 賢（新潟大）
米山喜一（鶴見大）



Soon-Ho Yim 会長（KAP）より表彰を受ける筆者



会場となった国際コンベンションセンター（ICC）



ウェルカムレセプションでの会場風景

第122回学術大会優秀賞 受賞者の声

第122回学術大会 課題口演優秀賞および課題口演賞



香川 良介 (大阪大)

栄養摂取を介した咬合支持と動脈硬化の関連に対する共分散構造分析
～ SONIC 研究～

このたびは、第122回日本補綴歯科学会学術大会におきまして、課題口演優秀賞に選出して頂き、大変光栄に存じております。

近年、歯の喪失と全身疾患との関連についての報告がなされていますが、その多くは、歯周病による細菌感染や慢性炎症を介したものであるとされています。一方で、歯の喪失は咀嚼機能をはじめとした口腔機能の著しい低下を引き起こすことが知られており、口腔機能の低下による栄養摂取の変化が全身疾患に関連することは容易に考えられることであります。しかし、このことを示す科学的根拠は乏しく、口腔機能の低下が栄養摂取の変化を引き起こし、その結果として全身状態へ影響を及ぼすことのエビデンスの確立は、我々歯科医師にとって非常に重要であり、歯科補綴学的意義は大きく、最優先に取り組むべき課題であると考えられます。

現在我々は、健康長寿の要因の探索を目的とし、地域住民高齢者を対象に大阪大学医学部、歯学部、人間科学部による共同研究としてSONIC研究を行っています。今回、このSONIC研究から得られたデータを用い、本研究では、咬合支持の喪失が栄養摂取を介して動脈硬化に関連することを初めて体系的に示しました。このことは、口腔機能と健康長寿との関連を考えるうえで重要なエビデンスであり、このようなエビデンスを根拠に、我々は歯科補綴治療の効果として、栄養摂取を強調していかなければならないと考えています。

最後になりましたが、本研究の機会を与えていただきました本学歯学研究科歯科補綴学第二教室の前田芳信教授、池邊一典講師、人間科学部の榎藤恭之准教授

ならびに医学部の神出計教授に厚く御礼申し上げます。また、本研究を遂行するにあたり数多くの助言やご協力を頂きました先生方に深謝いたします。



福安 翔 (大阪大)

化合物ライブラリーを用いた骨形成促進作用を有する小分子化合物の探索

この度、日本補綴歯科学会第122回学術大会課題口演優秀賞を受賞し、大変光栄に存じます。本研究は、私が大学院生の間、興味を持ち研究を行った内容であり、このような名誉のある賞を受賞したことは今後の励みとなりました。発表した内容は、機能的、審美的な補綴、インプラント治療の為に、確実な骨増生術が不可欠であるが、現在の骨移植術では外科的侵襲が大きく患者の負担が大きいため、低侵襲で安定した骨増生を目的に人工的なスキャフォールドに生理活性物質を加える試みが広く行われている。しかし、BMPやエムドゲインのような分子量の大きいタンパクはコストや免疫的な問題等いくつかの不利益を内在する。その不利益を解決する目的で、分子量が小さく、安価で、化学合成が容易な小分子化合物の使用が注目されていることを背景に、骨芽細胞分化促進作用を有する化合物を簡便かつ高い信頼度で検出するためのスクリーニングシステムを構築し、生体内における骨形成作用を有する化合物の探索を行ったという内容です。この研究を通して、未だ明らかでない骨組織形成の機序の解明や新たな創薬の分野へ貢献することで、歯科医療の一助となれば幸いです。最後に、このような機会を与えて頂いた大阪大学 大学院歯学研究科歯科補綴学第一教室の矢谷博文教授ならびに直接研究をご指導いただいております江草宏先生に厚く感謝申し上げます。





大島 正充 (東京理科大)

歯周組織を有する新規機能性インプラントの開発

この度は第122回日本補綴歯科学会におきまして、課題口演優秀賞を頂きまして、誠に光栄に思います。

歯の喪失に対する治療として口腔インプラント治療が開発され、現在の歯科治療に大きく貢献しています。最近の幹細胞と組織工学技術を融合させた再生治療技術の発展に伴い、歯科領域においても天然歯が有する生理的機能を回復可能な歯科再生治療の技術開発が期待されています。

本研究ではインプラント治療技術を発展させて、歯の生理的機能を加えた新規機能性インプラントによる治療概念を実証するために、歯周組織を付与したインプラントの開発を行いました。発生学的に歯周組織に分化することが知られているマウス胎仔の歯小嚢組織をインプラント体周囲に配置して移植することにより、歯周組織を有するインプラントの生着が可能であることを示しました。さらに、顎骨に生着した歯周組織を有するインプラントは、周囲組織と連携可能な歯根膜機能を有していると共に、中枢への伝達能を持つ神経機能を有していることを実証しました。

本研究における組織工学的手法による治療概念は、インプラントと歯周組織を結合させることにより歯根と同等の機能を再生する方法であり、幹細胞による組織再生療法、機能発現に適した人工材料開発、さらには、現在の欠損補綴治療技術を統合しうる次世代再生医療技術のひとつになることが期待されます。今後も歯科再生治療の実用化に向けて研究を進めたいと思います。



中島 隆 (岡山大)

抜歯窩肉芽組織からの新規間葉系幹細胞の同定

このたびは、第122回日本補綴歯科学会学術大会課題口演優秀賞に選出頂き、大変光栄に存じます。

成熟した組織に存在する間葉系幹細胞は、全身の様々な治療への有効性が示されています。しかし、骨髄等から間葉系幹細胞を採取する際の疼痛や感染の危険性、また、高齢者や有病者から質の高い細胞を大量に得ることが困難な場合があるなど多くの問題が解決

されていません。また、ES細胞やiPS細胞研究が脚光を浴びていますが、臨床応用には、まだまだ課題が山積しており、このような背景から、より簡便で良質な組織幹細胞を得る技術、もしくは新たな組織幹細胞の探索が必要不可欠です。そこで、我々は、周囲組織から多くの未分化幹細胞が遊走される創傷治癒過程にある抜歯窩から、質が高く組織再生に最適化された間葉系幹細胞を簡便に採取できるのではないかと、という仮説を立脚し検証しました。その結果、骨髄と比べ抜歯窩の肉芽組織から、より効率的に質の高い間葉系幹細胞もしくは前駆細胞が採取可能であることが明らかとなりました。

今後は、本研究結果に基づき、抜歯窩治癒過程における間葉系幹細胞の関わりを解明するとともに、この間葉系幹細胞の有効性について、詳細に検討していく所存です。

最後に、本研究の遂行にあたり多くのご指導をいただいた岡山大学インプラント再生補綴学分野の窪木拓男教授、園山 亘講師、大野充昭助教、そして貴重なご意見を賜りました多くの先生方に心から御礼申し上げます。



來田 百代 (大阪大)

都市部一般住民における動脈硬化のリスクと咀嚼能力関連因子との関係
—吹田研究—

この度は、第122回日本補綴歯科学会学術大会課題口演優秀賞に選出して頂きまして、大変光栄に存じております。

日本人の3大死因に心疾患、脳血管疾患が含まれており、これら動脈硬化性疾患のスクリーニング法として、頸動脈エコー検査より得られる動脈壁の内膜中膜複合体肥厚度 (IMT) が広く用いられています。近年、歯周病とIMTとの関連が議論されていますが、咀嚼能力との関連についてはほとんど検討されていません。そこで本研究は、IMTと咀嚼能力関連因子との関係について、国立循環器病研究センター予防健診部の健康診査、頸動脈エコー検査、歯科検診を受診した大阪府吹田市一般住民1,484名(50~79歳)を対象に検討を行いました。歯科検診において、機能歯数、歯周状態、咬合支持、咀嚼能率を検査し、各項目の低下の有無で2群に分けた場合の最大IMTを比較しました。その結果、50~70歳代の都市部一般住民では、特に女性において機能歯数の減少、咬合支持域の減少、咀嚼能率

の低下はいずれも歯周病と独立して動脈硬化性疾患のリスクの増加と関連している可能性が示されました。

今後は、本研究を縦断研究に発展させ、横断研究で明らかとなってきた関連について、さらに詳しく解析を行っていただければと考えております。

最後になりましたが、本研究の機会を与えていただきました本学歯学研究科歯科補綴学第二教室の前田芳信教授、研究推進に多大なご指導を賜りました小野高裕准教授、数多くの助言やご指導を頂きました先生方に厚く御礼申し上げます。



塩見 晶 (新潟大)

反復加圧刺激が口腔粘膜上皮の角化パターンに及ぼす影響
— 3次元口腔粘膜モデルを用いた検討 —

このたびは、日本補綴歯科学会第122回学術大会課題口演賞に選出していただき、大変光栄に思います。

有床義歯の装着に伴う義歯床下組織の組織学的変化として、口腔粘膜の変化と骨吸収があります。これまでに義歯床下粘膜の変化に関して、ヒトや動物を対象としたさまざまな実験が行われてきましたが、口腔粘膜上皮の正角化や錯角化、肥厚や非薄化などが報告されており、組織学的変化についての見解は一致していません。そこで本研究では、ヒト口腔粘膜上皮細胞と線維芽細胞を共培養した3次元口腔粘膜モデルに加圧刺激を加えることで、義歯装着に対して床下粘膜組織に引き起こされる組織学的変化および増殖・分化パターンの変化についてのメカニズムを解明することを目的とし、免疫組織化学的検討を行いました。研究の結果、上皮細胞増殖マーカー陽性細胞の減少、転写因子や分化マーカーの発現の変化および基底膜構成成分の発現減少が認められ、口腔粘膜上皮細胞の増殖能抑制と分化亢進、基底細胞の未分化性の喪失が起こっていることが明らかとなりました。

今後は骨吸収に関するサイトカインの検索を行うことで、義歯床下粘膜の変化が顎堤の骨吸収に及ぼす影響についても検討していく予定です。

最後に、本研究推進に多大なご協力を頂きました大阪大学大学院歯学研究科歯科補綴学第一教室の江草宏先生、直接ご指導を賜りました新潟大学生体組織再生工学分野の泉健次教授、包括歯科補綴学分野の諸先生方に心より感謝申し上げます。



福田 修二 (大阪大)

定量的感覚検査を用いた慢性痛を有する顎関節症患者における疼痛認知の歪みの評価

この度は、第122回日本補綴歯科学会学術大会課題口演賞を受賞させて頂きまして、大変光栄に存じております。

痛みはきわめて主観的な感覚であり、他者がそれを評価することは非常に難しく、なかでも慢性的な痛みを訴える患者では末梢の臨床所見や画像所見に異常を認めないにもかかわらず継続する痛みを訴えることが少なくありません。これまでに痛みそのものを評価する試みは行われていましたが、患者が痛みそのものを正確に認知出来ているのかどうかを評価する試みは行われていませんでした。

そこで本研究では、我々の領域において慢性痛への移行が報告されている顎関節症患者に対象を絞り、慢性痛を訴える顎関節症患者における疼痛認知の歪みの有無を検討することを目的として行いました。温熱刺激を用いた定量的感覚検査法と Visual Analogue Scale を用い、それらを Spearman の相関係数を用いて検討したところ、慢性痛を訴える顎関節症患者では刺激の強度を正確に認知することが困難な状態であることが示唆されました。今後は、被験者数を増やすことと、精神心理学的因子を分析に加えることで疼痛認知の歪みを引き起こす因子を検討することを考えております。

最後に、本研究に際してご指導頂きました大阪大学大学院歯学研究科口腔機能再建学講座クラウンブリッジ補綴学分野の矢谷博文教授、石垣尚一講師に厚く御礼申し上げます。



第122回学術大会 デンツブライ賞



岡本 信 (中国四国支部)

全部床義歯における片側性咬合平衡の得られる領域に関する形態計測的分析

この度は、私のような一開業医が、このような荣誉ある賞をいただくことができ、本当に光栄であり、感激しております。ご指導いただいた岡山大学の皆木教授、関係者の皆様には本当にお世話になりました。

総義歯作製を科学的に解析したい、誰でも確実に結果を出すことができる、そのような基準を示したい、という気持ちで私なりに臨床研究に取り組んでまいりました。

特に人工歯排列については、10年ほど前になりますが、スイスのチューリッヒ大学に1年間留学する機会を得、パラ教授に直接ご指導をいただき、その重要性和奥の深さを知ることができました。その後、自分なりに試行錯誤しておりましたが、何とか上下顎堤の対向関係を、咬合器の上方から透視して見ることはできないものかと考え、「オクルーザルマップ」という検査法を開発しました。上下顎堤の対向関係を画像として表すことができ、人工歯排列位置の決定に有用な方法だと考えています。

また、総義歯が安定して機能するには片側性咬合平衡が重要であると考え、片側性咬合平衡の得られる顎堤領域の検査を行い、排列位置の基準とする手法を開発しました。いずれの手法も補綴学会誌に論文掲載されておりますので、ご一読いただければ幸いです。

今後は、これらの手法を簡略化し、より明確な人工歯排列の基準を示すことができるよう継続して取り組んでまいります。今度ともどうぞ宜しくお願いします。



森澤 絵里 (昭和大)

毛包に存在する神経堤由来細胞を用いた骨芽細胞の分化誘導

このたび、日本補綴歯科学会設立80周年記念第122回学術大会において優秀ポスター賞を受賞いたしましたことを大変光栄に存じます。

現在私達は、顎骨や象牙質など多様な細胞への多分化能を有する神経堤由来幹細胞を利用した、歯槽骨再建技術の開発に取り組んでいます。今回の受賞内容は、その基盤を構築する上で最も重要な成体組織からの神経堤由来細胞の分離、培養、および分化誘導方法について検討したものです。従来の問題であった移植用の組織採取に伴う外科的侵襲を避けるため、私達は細胞を容易に採取できる毛包に着目しました。神経堤由来細胞がGFP(緑色蛍光タンパク質)を発現する遺伝子改変マウスを用いて、毛包に神経堤由来細胞が多量に存在することを確認し、それらを分離・増殖させることに成功しました。さらに、種々のサイトカインや培地を用いて効率的に骨芽細胞へ分化誘導する方法を確立しました。このことは、毛包に存在する神経堤由来細胞の有用性を示唆するものです。今後、動物への移植実験をおこなうことにより臨床応用を目指す一方、骨芽細胞への分化メカニズムについて解析する予定です。

末筆ながら、親身なご指導を賜りました昭和大学歯学部歯科補綴学講座の馬場一美教授、同口腔生化学講座の上條竜太郎教授、そして多大なるご協力を賜りました諸先生方にこの場をお借りして厚く感謝申し上げます。



佐藤 雅介 (明海大)

日中のクレンチングに対するバイオフィードバック訓練が夜間のブラキシズムに及ぼす抑制効果について

この度は、日本補綴歯科学会第122回学術大会において、補綴学会優秀ポスター賞を頂き誠に光栄に存じます。本発表は、大学院時代の集大成ともいえる内容です。報告は日中のクレンチングに対する携帯型筋電計を用いた電子音によるバイオフィードバック訓練を行い、夜間のブラキシズムの抑制効果を検証するという内容です。

バイオフィードバック訓練とは認知行動療法とも呼ばれており、様々な場面で応用されています。私達の研究室では、以前より多方面の先生方との共同研究を行い、携帯型筋電計を用いた研究を進めてまいりました。この携帯型筋電計の研究は、医工連携による新たな開発と応用を検討し、今後もさらなる発展に向けて進行中です。しかしながら、臨床応用に向けてはまだまだ越えなければならない課題が多く残されています。今回、補綴歯科学会から賞を頂いたことで、身の

引き締まる思いです。これからも、補綴学を学んでいる臨床家として歯科臨床への貢献ができるよう、研鑽を積んでまいります。

末筆ではございますが、本研究に多大なるご指導を頂きました藤澤政紀教授はじめ、明海大学機能保存回復学講座歯科補綴学分野の諸先生方に心より御礼申し上げます。



黒嶋伸一郎 (ミシガン大)

リンパ管形成不全と顎骨壊死

このたびは公益社団法人日本補綴歯科学会第122回学術大会において、デンツプライ賞に選出して頂き大変ありがとうございました。

ビスフォスフォネート (BP) 製剤服用患者に多く起こる顎骨壊死 (ONJ) は、病因が不明で有効な治療方法はいまだ存在しません。不適合な義歯やインプラント治療が ONJ の発生に関与するとの報告もあることから、ONJ の病態を理解することは安全な補綴治療を提供する上で不可欠であると考えられます。また、ONJ 患者の多くが BP 製剤と抗癌剤を併用しているため、口腔組織を含む全身の免疫機構が低下していることが考えられます。一方、感染などの免疫応答機構にはリンパ系システムが非常に重要な役割を果たすことが報告されています。そこで本研究は、免疫応答機構の低下を誘発するリンパ管の形成障害が ONJ の発生機構に関与するという仮説を立て、私たちが開発したマウス ONJ 発現モデルを用い、リンパ系システムの ONJ への影響を検索することを目的としました。その結果、BP 製剤と抗癌剤を併用した群で ONJ が発生し、さらに軟組織におけるリンパ管形成不全が惹起されていることが明らかとなりました。私達はこの新しい知見をもとに、今後は治療方法の開発に励んでいきたいと考えております。

最後に、本研究の機会を与えてくださいましたミシガン大学歯学部生物材料科学講座補綴科の山下潤朗先生に心より感謝の意を捧げると共に、厚く御礼申し上げます。



鈴木 善貴 (徳島大)

睡眠時ブラキシズムのクレンチング時における顎位と咬筋活動の検討

この度は第122回日本補綴歯科学会におきましてデンツプライ賞に選出して頂き大変光栄に存じます。

歯科臨床において、睡眠時ブラキシズムは咬耗や破折、顎関節症など顎口腔系に様々な為害作用をもたらすと考えられていますが、その因果関係を示す確たる証拠は未だ明らかにされていません。これは睡眠時ブラキシズムの運動様式により生じる為害作用も異なるものと考え、我々はこれまでに睡眠中でも測定可能な小型・軽量・高精度の6自由度顎運動測定器を開発し、睡眠時ブラキシズムの生体信号と顎運動の測定・解析を行って、数々の睡眠時ブラキシズムの顎運動特性を明らかにしてきました。

その中で本研究は、健常者の睡眠時ブラキシズムの中でもクレンチングの顎位と咬筋活動様式について検討し、クレンチングは咬頭嵌合位付近だけでなく、偏心位でも多く生じており、その際平衡側でも大きい咬筋活動が生じていることを明らかにしました。このような偏心位での持続的な咬筋活動が顎口腔系への破壊的影響を及ぼしている可能性があり、今後この運動と様々な為害作用との関係性を検討し、診断基準の一助になればと考えております。

最後に松香芳三教授、重本修何助教、大倉一夫助教をはじめ、本研究を遂行するにあたり、数多くの御指導、御協力を賜りました諸先生方そして研究に御参加頂いた被験者の方々に心より深謝致します。



第 122 回学術大会 カボデンタル賞



大野 充昭 (岡山大)

三次元・多視点観察が可能な口腔顎
顔面解剖アトラスの作製

解剖学的構造を三次元的に把握することは外科手術を施術するにあたって必須であると考えます。しかし、骨、筋肉、脈管、神経が複雑に配置された構造を、二次元で示された教科書で理解することは大変困難です。そこで我々は株式会社パナソニックと協力し、容易に三次元的な解剖学的位置関係を理解することが可能な解剖アトラスを構築し、第 122 回学術大会にて報告致しました。今後は、本解剖アトラスの教育効果を図ると共に、卒前、卒後教育に取り入れていきたいと考えている所存です。

最後になりましたが、本事業の準備、運営に多大なご尽力を頂きました株式会社パナソニックの末次様、岡山大学インプラント再生補綴学分野の窪木拓男教授、人体構成学分野の大塚愛二教授、麻酔・蘇生学教室の武田吉正先生、口腔機能解剖学分野の山合友一朗先生に厚く御礼申し上げます。また、検体となられたご遺体、またそのご家族の方々に感謝致します。



山脇加奈子 (中国・四国支部)

中等度認知症患者に行った飴を用いた口腔機能リハビリテーションの一症例

この度、平成 25 年度第 122 回学術大会にてカボデンタル賞を賜り誠に光栄に存じます。

当院は認知症治療病棟を含む高齢者ケア複合施設であり、近年増加し続ける認知症患者が、摂食嚥下障害を伴う症例に多く出会います。従来の訓練は十分に指示が入らず、訓練もままならないことも少なくありませんでした。

そこで本症例では、飴を舐めるといった簡易的な口腔機能リハビリテーション(舐摂機能訓練)を、従来の訓練に加え 6 ヶ月間行うことを試みました。話す事や口を動かすことが少ない高齢者にとって、飴を舐め続けるといった一見単純な動作が、口腔または口腔周囲の廃用防止・機能向上につながり、口腔内環境を改善する可能性を報告させていただきました。勿論、従来の訓練も可能であれば併用する必要があると考えます。

また、最期まで食べさせたいと思いがあがる家族の中には、食事ができないならば飴だけでも舐めさせたいといった声も実際にございました。今後、認知症患者が増加傾向にある中で、家族の思いを汲み取ることも医療側にとって必要不可欠であり、本症例がそのような声に応える一例となれば、幸甚です。

最後になりましたが、本研究の機会を与えてくださいました赤川安正先生をはじめ、数多くのご指導およびご協力を賜りました医療法人 PIA ナカムラ病院理事長中村英雄先生、津賀一弘准教授、吉川峰加准教授、病棟スタッフ、歯科衛生士の方々に感謝の意を捧げるとともに、厚く御礼申し上げます。



【投稿募集】

Letter for Members では、各支部の学術大会報告、日々の研究の報告など、会員の皆さまの投稿をお待ちしております。採否は事前にお知らせいたします。

投稿は、公益社団法人日本補綴歯科学会事務局(jpr-edit01@max.odn.ne.jp)まで、メールにてお寄せください。